

山形県埋蔵文化財調査報告書 第47集

関 B 遺 跡

山形県教育委員会

山形県埋蔵文化財緊急調査団

1981

關 せき B 遺 跡

發 掘 調 査 報 告 書

1981年3月

序

国指定の史跡として、出羽国古代の国府に擬定されている「城輪柵遺跡」、また古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」などをふくむ酒田市東部の水田地帯は、埋蔵文化財の宝庫であります。城輪柵の南に位置する東平田地区も古くから土器類や柱根が出土する地として知られ、国府に関連する遺跡が存在するとの推測もなされてきました。

この度、東平田地区の境興野、北田、関Bの三つの遺跡が、本年度施工予定の県営ほ場整備の事業区域内にふくまれることになったので関係各機関と協議の結果、文化財保護法により事前に緊急発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存をはかることになりました。発掘調査は庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、5月17日より開始して8月29日で三遺跡の調査を予定通り完了いたしました。

調査の結果、平安時代の一般庶民の集落跡があらわれ、東北古代史の研究上、貴重な資料を提供することができました。本報告書は、記録保存の一環としてその成果を述べたものであります。

調査にあたって種々御配慮と御協力をいただいた最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市教育委員会、地元の関、境興野の部落長をはじめ地元の多くの方々、また現地において御指導、御助言いただいた柏倉亮吉山形大学名誉教授、新野直吉秋田大学教授に、記して深甚の謝意を表する次第であります。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

例　　言

1. 本書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した県営ほ場整備に伴なう関B遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和55年7月10日から同年8月27日まで行った。
3. 本書の作成は、川崎利夫、野尻 侃、安部 実が担当執筆した。
4. 実測図等の作成においては中村敬三、佐藤正子、水落みち子、石井 節の協力を得た。
5. 編集・写真撮影は安部 実が担当した。

調　　査　　体　　制

調査主体	山形県教育委員会
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者	山形県教育庁 庄内教育事務所埋蔵文化財分室 川崎利夫（主　查）　野尻 侃・安部 実（技 師）
調査協力	最上川右岸土地改良事務所　日向川土地改良区　酒田市教育委員会
事務局	主 幹 小嶋茂太（庄内教育事務所長兼埋蔵文化財分室長） 主幹補佐 佐藤良一（同 次長） 事務局員 大須賀芳夫（同 総務課長）　菅原 猛（同 総務主査） 吉村庄子

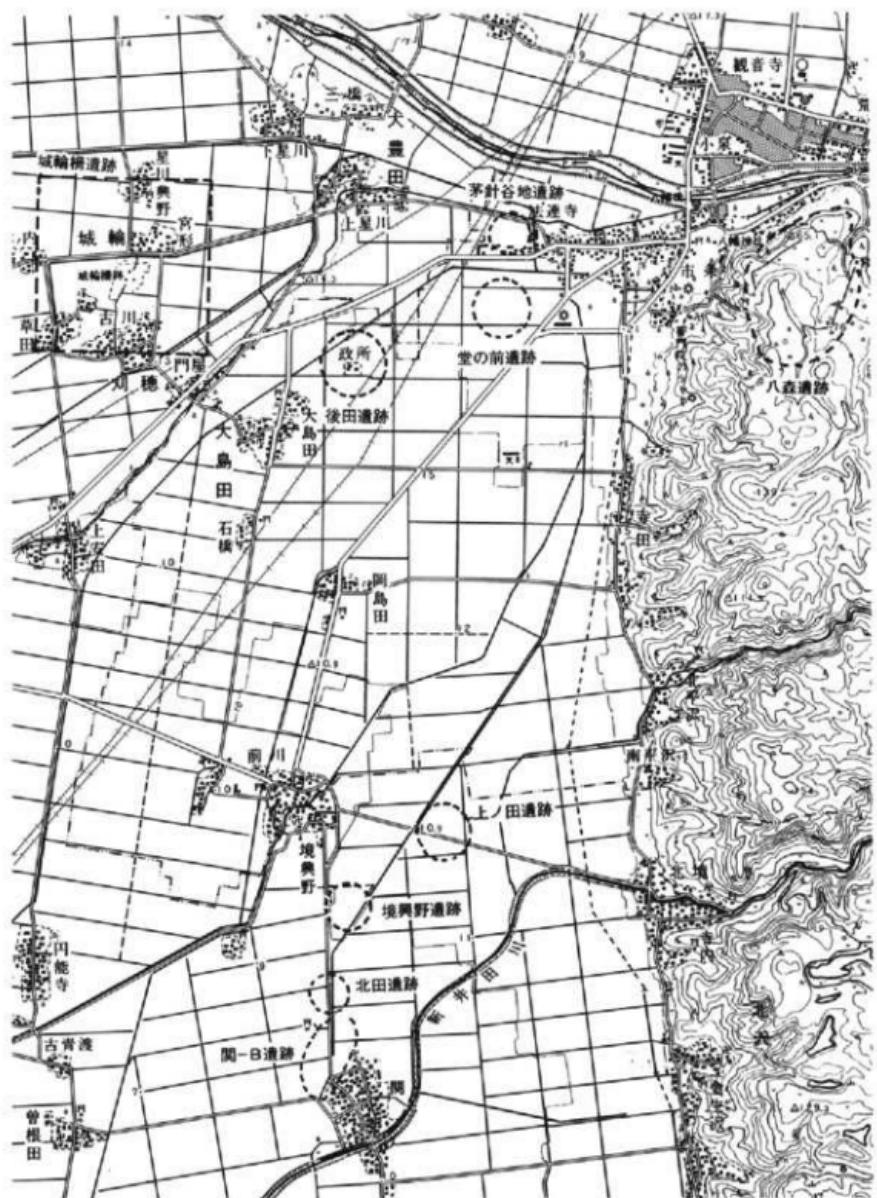
目 次

I 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の概要	1
II 遺跡の概要	
1. 立地と環境	3
2. 遺跡の層序	4
III 遺構と遺物	
1. 遺構	5
2. 遺物	10
M まとめ	24

挿 図

図 版

第1図 遺跡位置図	図版1 遺跡遠景・遺跡近景
第2図 グリッド配置図	図版2 試掘状況・精査区近景
第3図 土層図	図版3 SE 2井戸跡
第4図 遺構平面図	図版4 SE 2井戸跡
第5図 SB 9・16・46実測図	図版5 SE 2井戸跡
第6図 SK1・SE 2・SK 3実測図	図版6 SK1土壤跡・SK49土壤跡
第7図 須恵器	図版7 SK 3土壤跡
第8図 須恵器	図版8 SK 4土壤跡・SD 6・8・5溝跡
第9図 赤焼土器	図版9 須恵器
第10図 赤焼土器	図版10 須恵器
第11図 黒色土器	図版11 赤焼土器
第12図 墨書き土器	図版12 赤焼土器
第13図 木製品	図版13 黒色土器
第14図 木製品 SE 2井戸跡出土井戸枠	図版14 墨書き土器
第15図 木製品 SE 2井戸跡出土曲物	図版15 木製品
第16図 北田・関B遺跡遺構平面図	
第17図 北田・関B遺跡試掘境内遺物出土状況	



第1図 遺跡位置図

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

酒田市の東部水田地帯に位置する境興野、北田、関Bの3遺跡は、地元の伊藤安記氏によつてはやくから注目され、昭和38年版の「山形県遺跡地名表」にも登載されている。それによれば、須恵器や井戸跡などが発見されている遺跡である。昭和52年の「山形県遺跡地図」にも、佐藤祐宏氏の調査により平安時代の集落跡として記載されている。

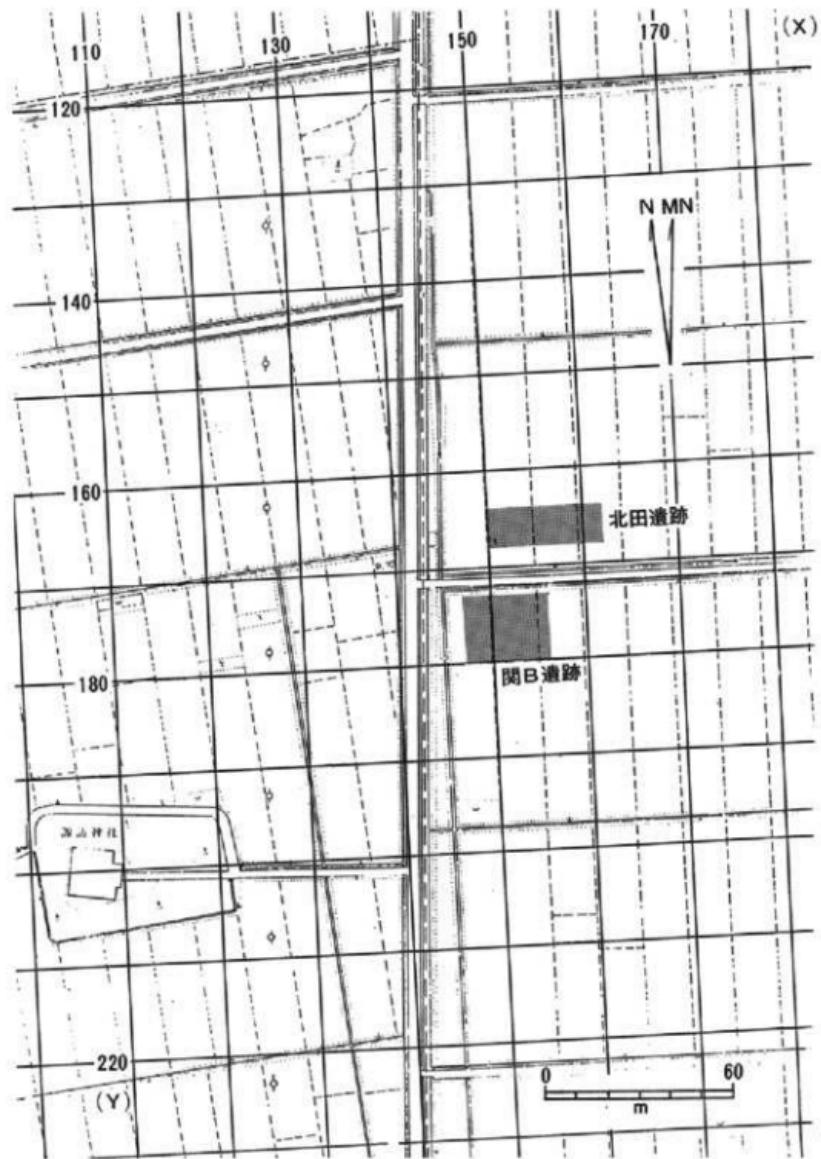
これらの遺跡が、昭和55年度施工の県営ほ場整備事業の予定区域に入ることになったので、前年より関係各機関と協議を行つてきた。そして遺跡の範囲や性格、年代、遺物や遺構の包含層を確認するため、昭和54年10月17日より19日まで庄内教育事務所埋蔵文化財調査室(旧称)において試掘を含む事前調査を実施した。

それらの結果にもとづき、更に協議を重ねて昭和55年度に山形県教育委員会が主体となつて緊急調査を行うことになった。そして昭和55年4月25日に、地元関係者、工事主体の最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市教育委員会、調査主体の県教委などが東平田公民館に参集して打合せ会を開いた。それによって発掘調査は庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、5月12日から8月末日まで3遺跡の緊急調査を実施することとなったのである。

2. 調査の概要

調査は北隣りの北田遺跡と併行して開始した。期日は7月10日～8月27日までの延23日間である。関B遺跡に関する調査の経過は以下の通りである。

- | | |
|------------|---|
| 7月10日～16日 | 遺構・遺物の集中区域を探る試掘作業。 |
| 7月17日～25日 | 遺物の集中区域は調査区の北側に存在し、精査区を147～155～173～179グリッドとし、重機による表土剥ぎと面整理作業。 |
| 7月28日～8月1日 | 面整理作業の結果、発見された遺構は溝跡2条、井戸跡1基、掘立柱建物跡3棟、土壙4基、ピット多数である。 |
| 8月4日～7日 | 井戸跡内より曲物2個、矢板、掘り方の部分から本盤1を検出。層序の観察を行う。3棟の建物跡柱穴の掘り下げや溝跡の精査、SK3土壙からは矢板が立ち組まれて検出された。5日には境興野遺跡での県民参加の発掘を行う。 |
| 8月18日～27日 | 遺構の写真撮影、平面図測図、レベリング作業。26日には北田・関B両遺跡の現地説明会を行い、27日にはすべての調査を終了した。 |



第2図 グリッド配置図

II 遺跡の概要

1. 立地と環境

関B遺跡は、酒田市大字関字北田に所在する。酒田市街の東6.3km、関集落の北の境興野にいたる水田中にあり、標高は10m前後である。その1.5km東は出羽丘陵の山麓にあたる。従って、庄内平野の北西部に位置することになる。

関より境興野に至る幹線農道に沿って約1kmの間に、北より境興野、北田、関Bの3遺跡がつなっている。関B遺跡はその南側を占め、関集落の北にあたる。幹線農道の東西に遺跡は広がるが、遺跡の北側には都波岐神社と諏訪神社がある。都波岐神社は、いま諏訪神社に合祀されて水田中にわずかにその痕跡を残すにすぎないが、諏訪神社は延長年間(923~931年)に信濃より勧請したと伝えられる古社である。林に囲まれたなかに立派な社殿が建ち、広い社地を有している。

これらの遺跡群より北北西2.2kmのところには、平安時代における出羽国の行政の中核である国府に擬定される城輪柵遺跡の南側外郭線がある。本遺跡群も、城輪柵が国府としての機能を果していた時期に形成されたものであり、何らかの関連を有することは想像にかたくない。

いま庄内北部の穀倉地帯として美田が広がる荒瀬川左岸の城輪柵遺跡を中心とした酒田市東部から八幡町にかけては、平安時代の官衙跡や集落跡が数多くみられる。城輪柵より東の八幡町にかけて、国分寺に擬せられるむきもある堂の前遺跡、さらに出羽丘陵の段丘上にある八森遺跡は「三代実録」仁和3年(887年)の条により一時的に移転した出羽国庁という説もある。

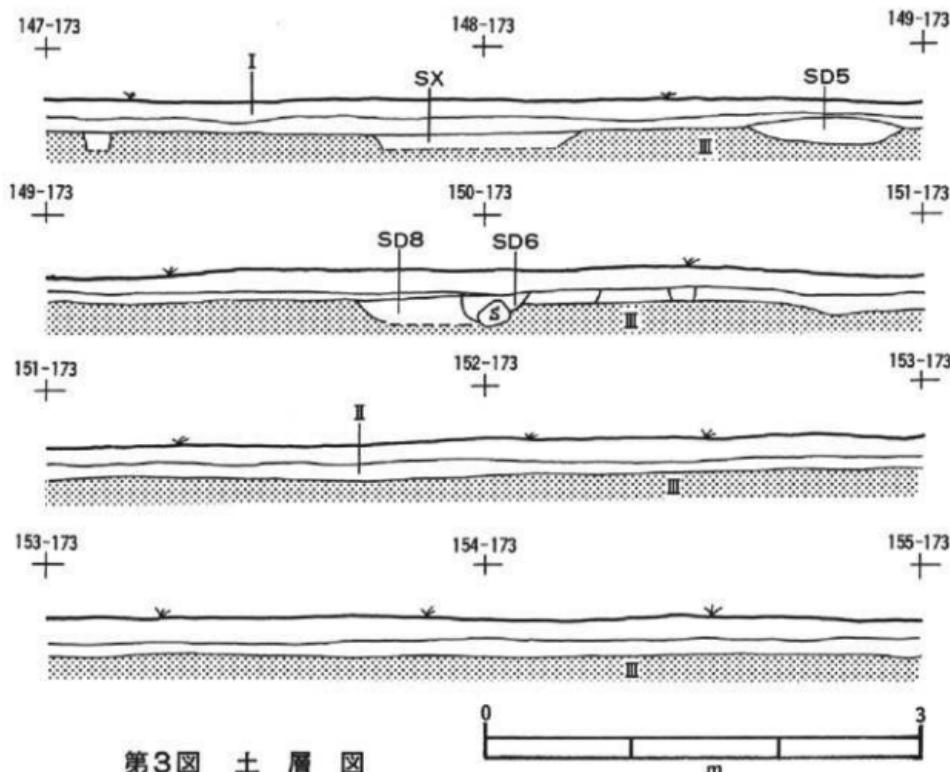
本遺跡群の北東にある上ノ田遺跡は、官衙跡と思われる掘立柱建物跡や井戸などの遺構とともに多量の墨書き土器が発見された。さらに南側の関と横代の中間には、喜田貞吉博士によって出羽国分尼寺に比定されたことがある高阿弥陀遺跡がある。大概新田から手藏田にかけては墨書き土器を含む多量の土器が出土しており、円柱根なども発見されており古代の公的施設が存在した可能性がある。

東方の出羽丘陵の一部をなす低丘陵地帯には、これらの遺跡に須恵器を供給した窯跡群が多数分布しており、泉谷地、願瀬などは一部調査が行われている。中世には鷹尾山修験の栄えたところで、山麓の生石延命寺を中心に南北朝時代の自然石塔婆(板碑)が多くみられる。また、このあたりには朝日山城をはじめ中世の館跡も多く、まさに平安時代から中世にかけての遺跡の宝庫でもあり、その再検討がまたれるところである。

2. 遺跡の層序

本遺跡の東方にある出羽丘陵を源とする小河川が沖積平野を形成し、これにしたがい西に向って標高も低くなっている。遺跡を覆っている土層は2層あることが観察され、上から順にⅠ・Ⅱ層とした。以下に、その土層の説明を行う。

- 第Ⅰ層 明茶褐色微砂質土 稲カブの根が入り込む、やや粘性をもつ耕作土である。厚さは10~18cmを測る。
- 第Ⅱ層 黒褐色微砂質土 炭化粒子を含む。暗青灰色シルトがまだらに混じる。土器片を包含する。厚さ6~10cmを測る。
- 第Ⅲ層 青灰色細砂質土 所によりシルト質の所もある地山層である。



第3図 土層図

III 遺構と遺物

1. 遺構

SB9建物跡 第5図

第Ⅲ層上面で掘り方EB10～15を検出した。桁行2間、梁行1間の東西棟である。掘り方は24～34cm内外の楕円形である。柱痕はEB12を除いたすべてにあり、直径20～25cmの円形で深さは23～36cmを測る。建物跡の方向は東側柱列で測定して、真北より14°西へ振れる。柱痕を基にした柱間寸法はEB10～11～12間で200+240cm、EB15～14～13間で200+270cm、EB10～15間で280cm、EB12～13間で260cmを測る。掘り方の覆土は暗青灰色微砂質土で炭化粒子を含む。

SB16建物跡 第5図

第Ⅲ層上面で掘り方EB17～21を検出した。SB16とSB9は重複しているが関係は未詳である。桁行2間、梁行1間の東西棟である。EB17とEB18の間の、柱が存在したと考えられる場所には暗渠があり破壊されたものと思われる。掘り方は24～32cm内外の円形である。柱痕はすべてにあり、直径10～16cmの円形で深さは30cmを測る。建物跡の方向は東側柱列で測定して、真北より21°30'西へ振れる。柱痕を基にした柱間寸法はEB18～17間で420cm、EB19～20～21間で215+205cm、EB17～21間で286cm、EB18～19間で310cmを測る。掘り方の覆土は暗青灰色微砂質土で炭化粒子を含む。

SB46建物跡 第5図

第Ⅲ層上面で掘り方EB22・23・47・48を検出した。1×1間の小さな建物跡である。掘り方は16～26cm内外の楕円形である。柱痕はすべてにあり、直径10～15cmの円形で深さは22～30cmを測る。建物跡の方向は東側柱列で測定して、真北より15°30'西へ振れる。柱痕を基にした柱間寸法はEB23～47間で240cm、EB47～48間で250cm、EB48～22間で240cm、EB22～23間で260cmを測る。掘り方の覆土は暗青灰色微砂質土で、炭化粒子を含む。

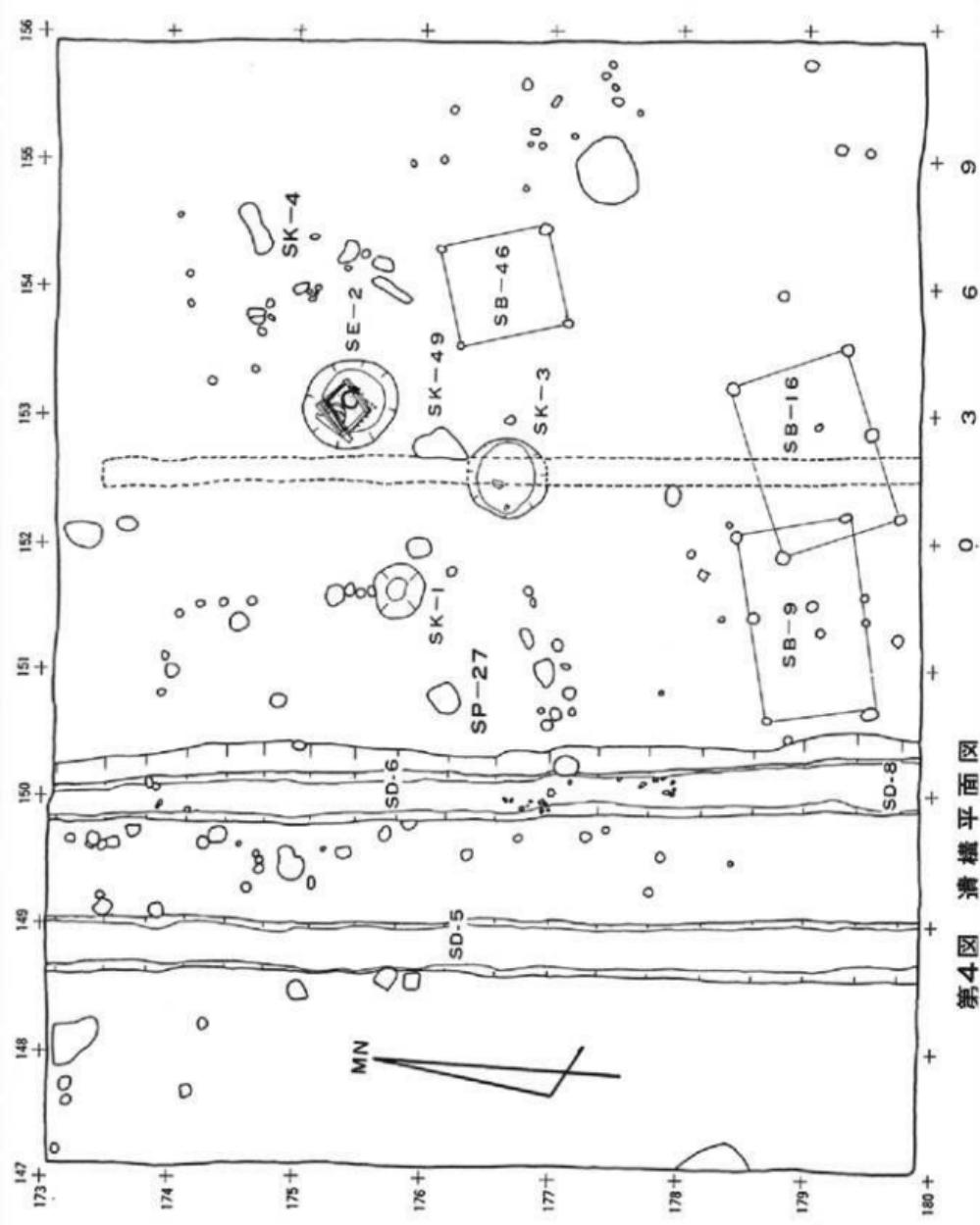
SK1土壤跡 第6図

第Ⅲ層上面で検出された。平面形は長径130cm、短径120cmを測る楕円形である。深さは62cmを測り底は平坦である。覆土はレンズ状に堆積しており、4層は草の茎と思われる焼成炭化物がぎっしりつまっており、もさもさしている。性格は不明である。

SE2井戸跡 第6図

第Ⅲ層上面で検出された。当初は土壤跡と考えられ、掘り下げの過程で井戸跡と判明した。掘り方は長径220cm、短径195cm、深さ105cmを測り、平面形は楕円形を呈する。掘り

第4図 溝槽平面図



方の北西寄りに立板をならべ、その中に一辺約90cmの井形に組んだ井戸枠が2段検出された。上段は2本だけで、半分浮き上った状態で埋っていた。立った状態で検出された立板は1枚だけであるが、覆土3層中より立板が他に2枚出土した。底面精査の際、一辺3～5cmの杭が14～18cmの間隔で井戸枠の外側に平行して、南西辺で3本、南東辺で5本打ち込まれていたことが判明した。井戸の底部、井戸枠内より過水孔の役割をしたと考えられる、底が無い曲物が2個出土した。他に覆土・掘り方内より木片が出土している。

立板は、幅9～14cm内外、長さは現存長で96cm内外、厚さ1.5cm内外を測る。材質は未詳であるが、杉かとも思われる。井戸枠は幅6.9～9cm、長さ90cm内外、厚さ3cm内外を測る。材質は檜と思われる。底には玉石が敷きつめてあった。

構築法は、底に玉石を敷きつめ曲物、井戸枠を設置し、その外周に立板を打ち込み、さらにその外周に杭を打ち込むという三重の構造により構築した後に枠板と掘り方との間に土を埋め戻している。

井戸枠内の埋積土は3層あり、すべて軟質である。掘り方の埋め土(図中4)は暗青灰シルトと暗褐色シルトとの混合土であり、土器片、木片、木盤(RW5)などが多数出土した。

SK3土壤跡 第6図

第Ⅲ層上面で検出された。長径195cm、短径180cm、深さ94cmを測り、平面形は梢円形を呈する。底は平坦である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。板状木製品が4枚立ち合わさった状態で出土した。他に矢板の残木片等が出土している。覆土は3層あり、2層は焼成炭化物層である。3層上面で焼土を検出した。3層は暗青灰色シルトと茶褐色シルトが混じった埋め土である。

土壤跡として扱ったが、矢板片の出土、3層が埋め土である等の事から井戸を廃絶した跡の可能性もある。

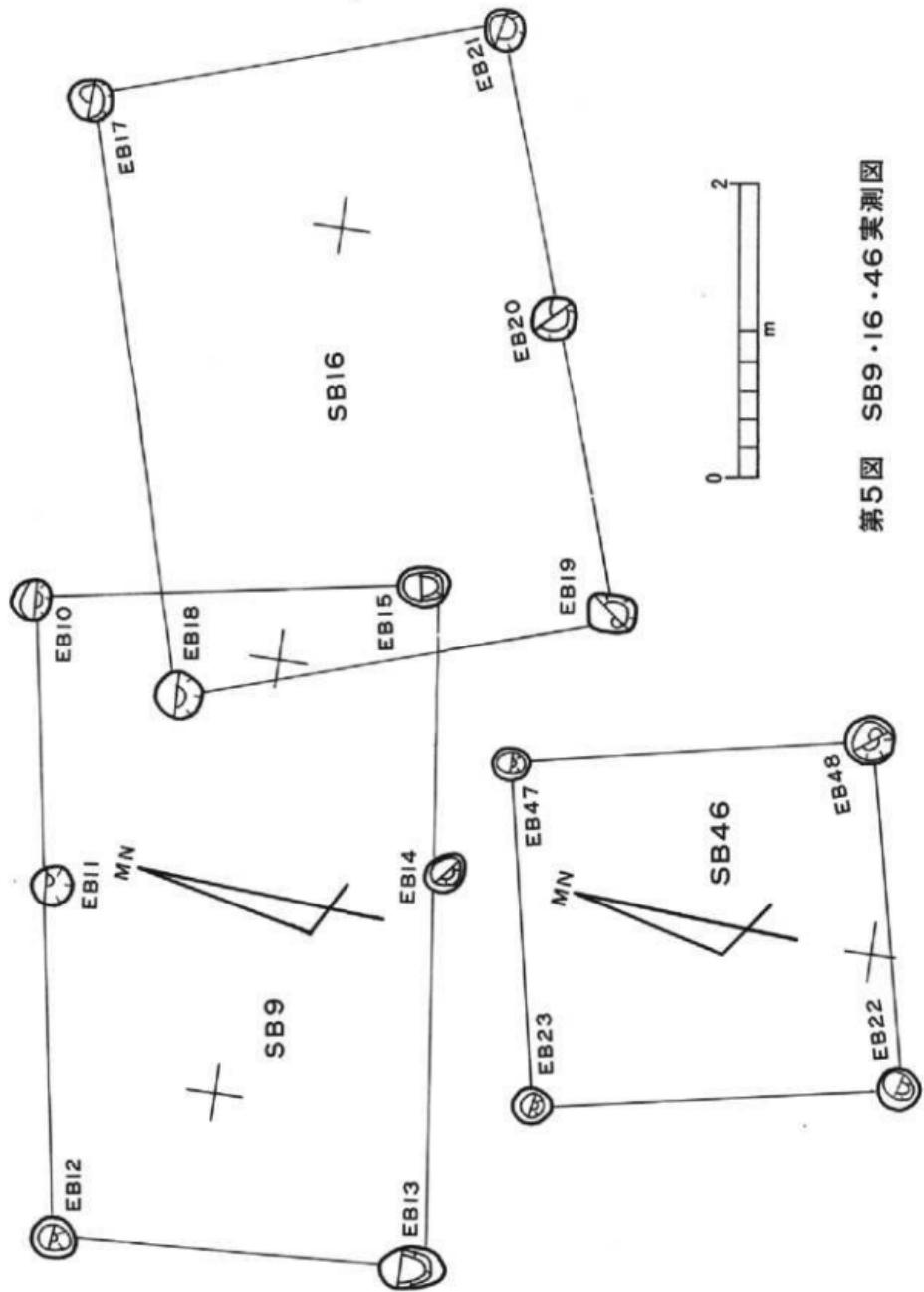
SD5溝跡

精査区の西端寄りに検出し、方向は真北より3°29'西へ振れ南北へのびる溝跡である。幅は上場で110～140cm、深さは11～16cmを測り、断面形は舟底状を呈する。底は平坦で検出した範囲内での傾斜は見られず、流水方向は不明である。覆土は1層で、黒褐色微砂質土でしまっており炭化粒子を含む。

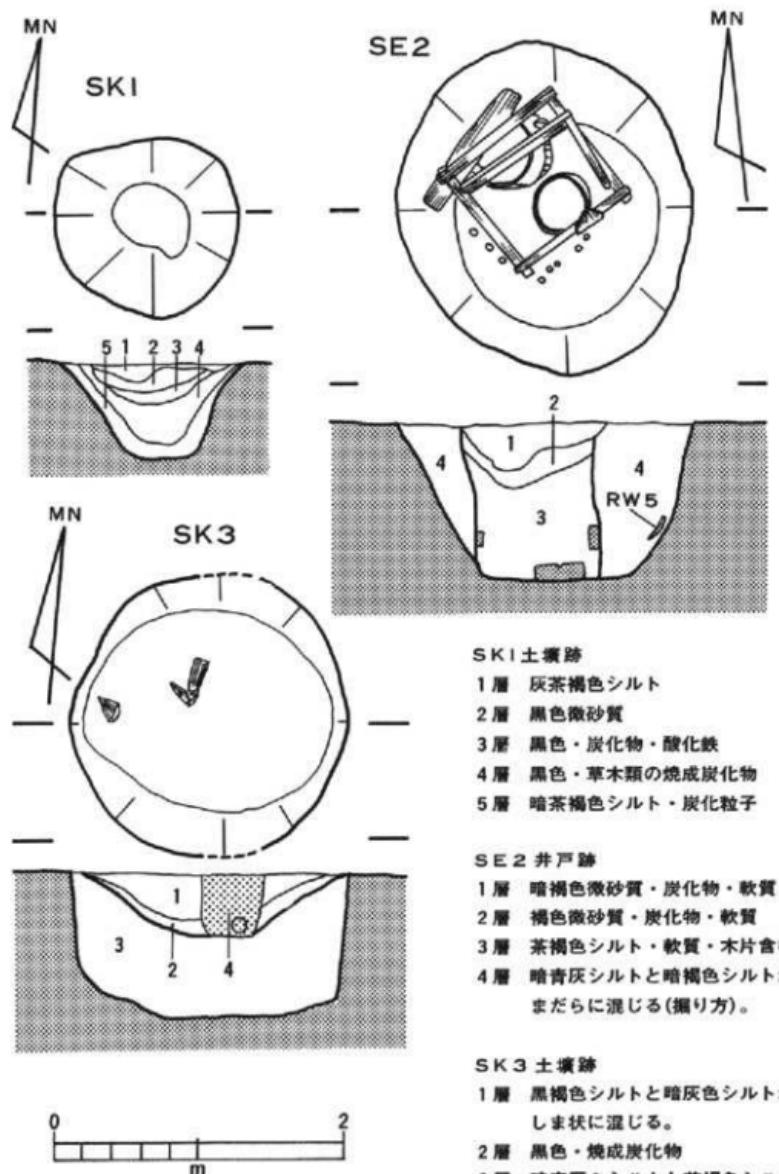
SD6・8溝跡

精査区の西端寄りに検出した。SD5に平行している。SD6がSD8の中央を切っており、SD6が新しい。

SD6は上場で幅40cm内外、深さ20cm内外を測り、断面形はゆるいU字形を呈する。覆土は1層で、黒褐色微砂質土で泥臭く、時期的には新らしいものと考えられる。



第5図 SB9・16・46実測図



第6図 SK1・SE2・SK3実測図

SD 8 は上場で幅150~200cm、深さ15~18cmを測る。東辺全域に幅80cm内外、深さ17cm内外のテラス部が存在する。検出した範囲内での傾斜は見られず、流水方向は不明である。覆土は1層で茶褐色微砂質土である。

なお、特に遺構としては取り上げなかったが、SD 5とSD 8の溝が走っている中間が道路としての可能性があり、幅は220~250cmを測る。

2. 遺 物

本遺跡から出土した遺物は、須恵器、赤焼土器、黒色土器などの土器類、陶磁器類、木製品である。陶磁器は後世の流れ込みによる混入で、遺構とは直接的な関連がない。土器類は、2・3の完形環類を除けばすべて破片である。破片から数えた土器類の割合は、総数6,993片中、須恵器40.7%、赤焼土器54.7%、黒色土器3.5%、陶磁器1.1%であり、北田遺跡と同様、須恵器の占める比率が高い。

須恵器 壺、壺、長頸壺、短頸壺、壺、环、高台环、蓋などの器種があるが、环類はもっとも多い。壺や壺など大形品は表面条線状叩目、内面同心円状、又は青海波状の叩き縮めが認められる。环類は底部の切り離しが回転笠切りによるものが主体であり、回転糸切りは比較的少ない。笠切りの环は口径12cmより13cm、底径3.5cm前後、底径6.5cm前後のものがもっと多く、低くて底の大きい器形が特徴で体部は外反しながら立ち上がる。糸切りの环は、底径がこれよりも小さい。糸切りの环は底部と体部の境界が明瞭であるが、笠切りのものはこれが明瞭なものと、丸味をおびて立ち上がるものとの両様がある。环類にあっては、ろくろから切り離した後の再調整のないのが普通である。

赤焼土器 壺、壺、环、皿などがあるが、やはり环類がもっとも多い。环類はろくろ切離し後の再調整がなく、すべて糸切りである。壺類には表面に須恵器と同様の叩目が施され、口縁部が「く」の字形に屈曲して口唇に至る長胴形に近い形をなすものが多い。壺の類も叩目を有する。これらには煮沸用としての機能があったためか、火熱によって焼けて二次的に生じた黒斑の痕跡を残すものが多い。

須恵器をしのいで赤焼土器が多くなっていることは、日常の生活雑器として炊飯用などに占める比重が大きかったことを示している。

黒色土器 両面黒色のものもあるが、大部分内黒の、いわゆる内面のみ黒色処理したものが多い。环と壺に限定され比較的大形のものが多く、土器の吸水性を防ぐ作用を果しているもので液体状のものを入れる器であったと思われる。底部は糸切りのものや付高台を有する。この中に、明らかに内面に漆を塗付したものも2片ほど出土している。

陶磁器 大宝寺焼、伊万里、唐津系の破片が多いが、近世以降のもので後世の混入である。

出土数は僅少である。他に1片、青磁の破片が出土している。

墨書き土器 本遺跡より20点の墨書き土器片が出土している。内2点は破片を硯として使用した転用硯で、墨痕が明瞭である。大部分が須恵器の破片であり、赤焼土器に墨書きされたのは5点である。範切りの須恵器环の底部に書かれた例が多い。

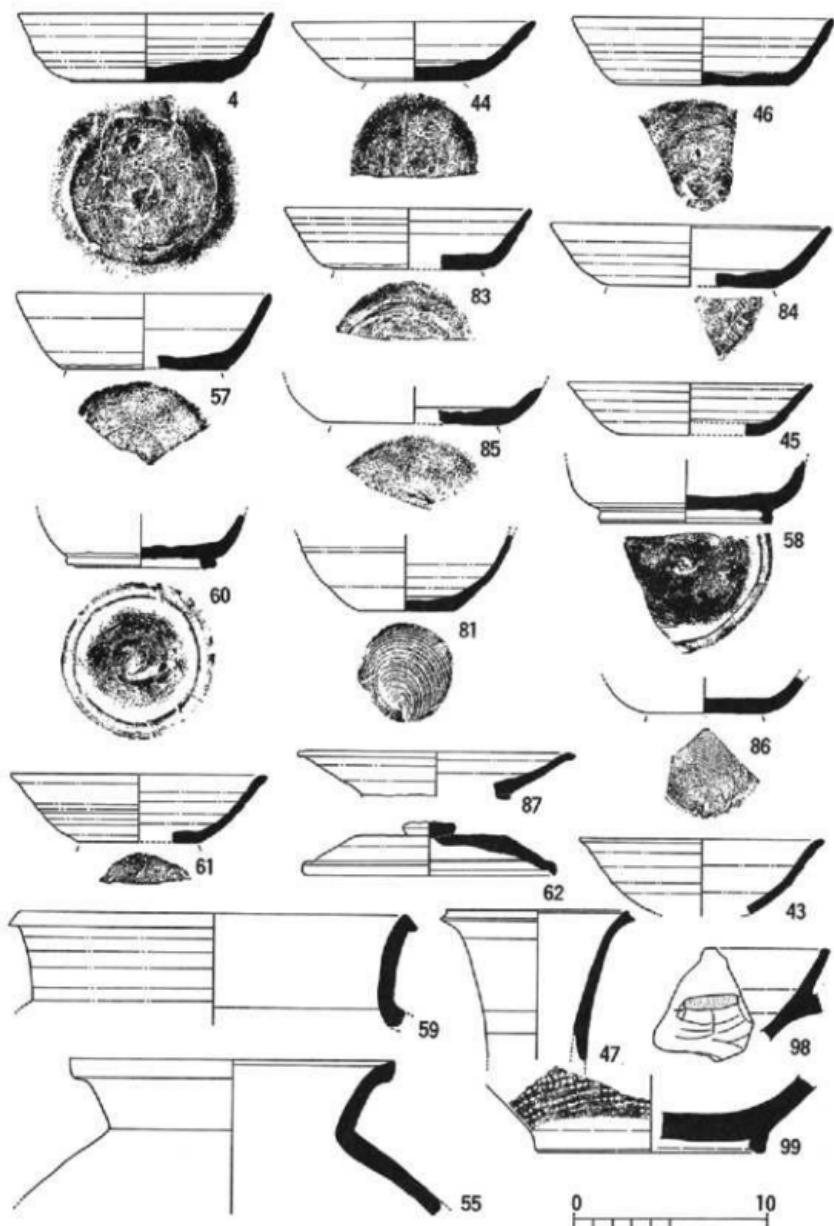
特に注目されるのはSE2井戸跡より13点の墨書き土器が出土していることで、「靈長」という文字が明瞭に読みとれるものが2点あり、他のものにも同様な文字が書かれてあったと推測される。廃絶された井戸跡で後に、ごみ捨ての土壤となったと考えられるSK3からも「万」と判読できるものが1点出土している。「靈」は、もともと人びとが雨を欲するという古い意味があり、「長」は未長くという意味があるから、水が枯れることなく永久にこんこん湧き出るようにという願いをこめて井戸に投げ入れた呪付的なものであったと思われる。

木製品 SE2の井戸を中心に、良好な状態で各種木製品が検出された。井桁状に柄にはめ込まれて方形に組まれた井戸枠、井戸の底部に据えられていた曲物、木盤などが主で、他に若干の木片が出土している。

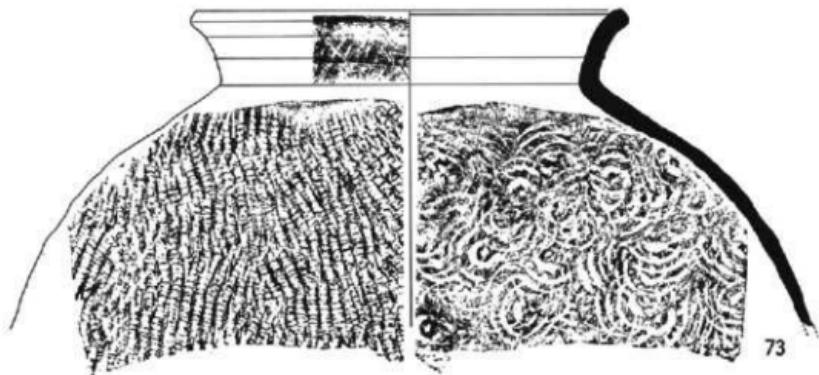
井戸枠については遺構の項で詳述したのでここでは触れないが、曲物は通水孔の役割を果しているため底はない。RW8は径43.4cm、高さ13.6cm、厚さ8mmから4.5mmの薄い板に縦に筋目をつけて曲げやすくし、これらが円く二重にめぐり、合わせ目のあたりに幅13.6cmの板を内巻きにし、桜の皮を用いて8か所でとめている。RW9は前者よりも大きく、径49cm、高さ18.8cmで構造は同じであるが、留めの部分には木釘を打ち込んでいる。井戸枠の外側には、細い板を縦に打ち込んで井戸を補強している矢板が数枚確認されているが、大抵上方は腐朽している。これらは、土中に差し込みやすいように先端を削っている。

その他、SE2の井戸跡の掘り方から木盤が出土している。口径41.4cm、高さ12.8cm、底径26.4cmを測る大盤である。高さ3.5cmほどの台付きで体部が台に接するあたりで、ややえぐりこんだ稜を形づくり直線的に外方へ開く。ろくろを用いて削られた痕跡が明らかで、木地のままである。口縁部が一部分欠損している。内面にも、ろくろ削りのあとが認められる。

他に「寛永通宝」が3枚出土している。



第7図 須恵器



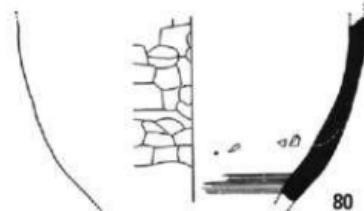
73



89



56



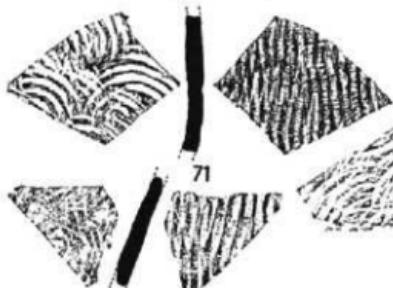
80



94



95



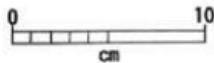
71



93



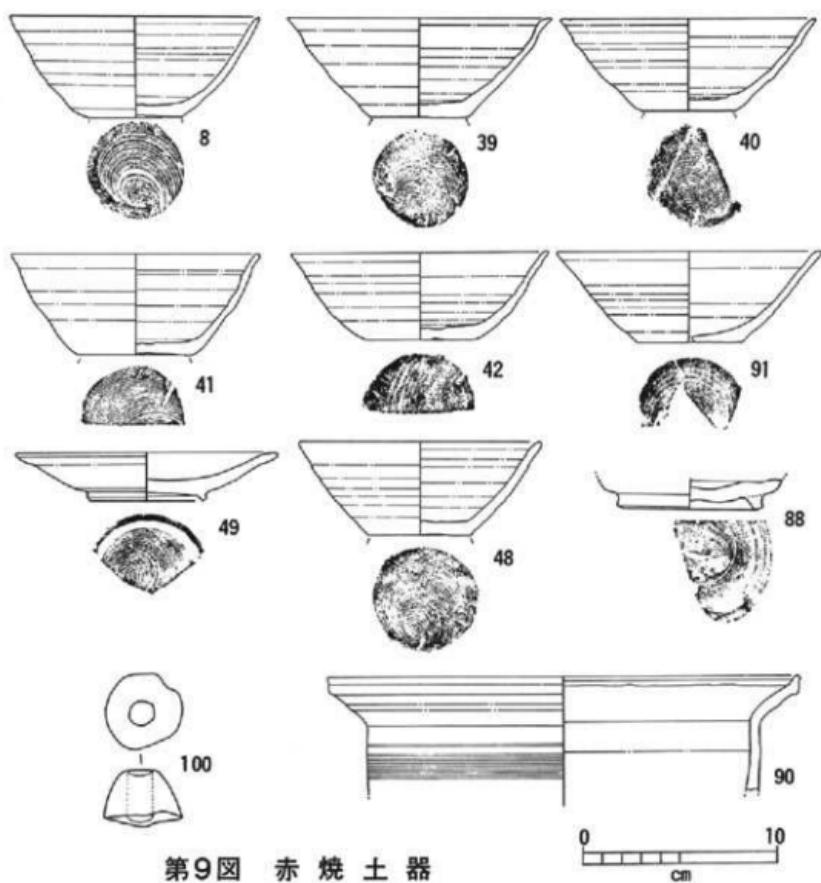
92



第8図 須恵器

○須恵器

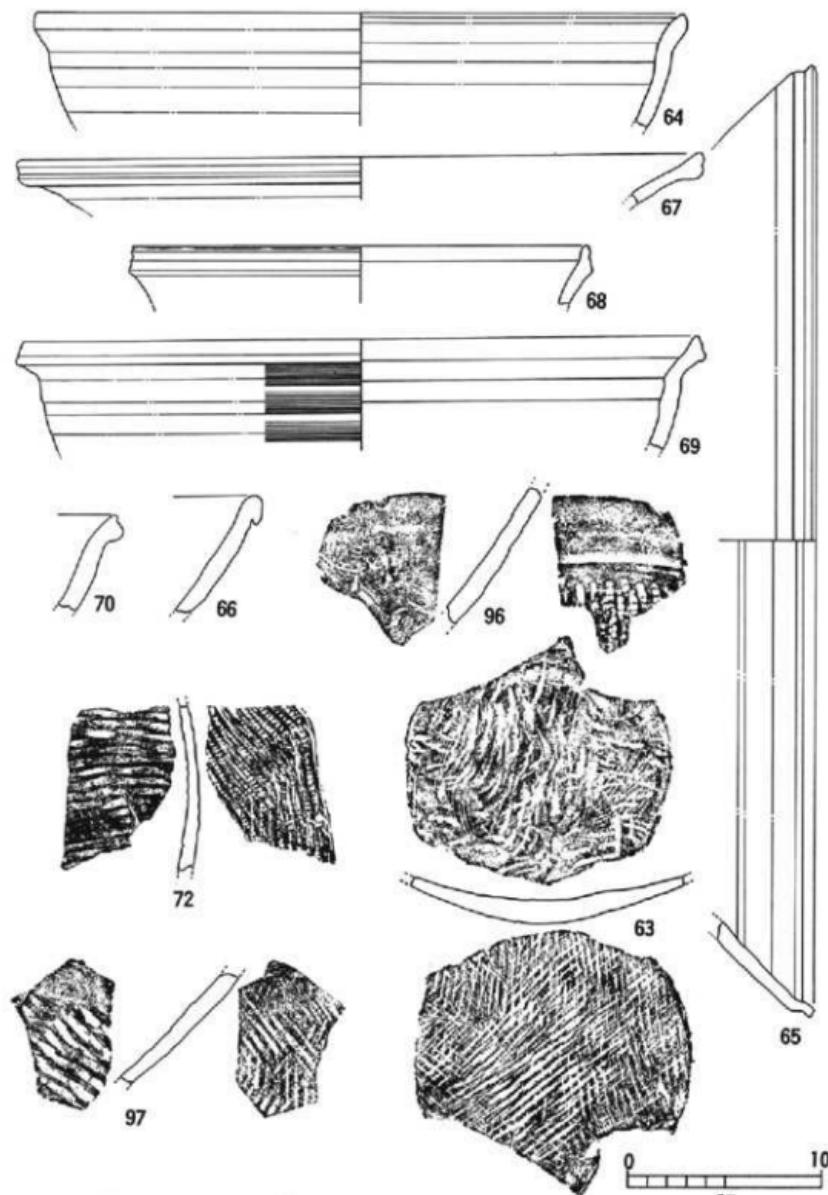
遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	調整技法	出土地点-層位
		口径	底径	器高						
4	环	130	76	36	明灰色	粗砂混	良	ヘラ切り		SP3I-F1
44	环	124	49	31	暗灰色	粗砂混	良	ヘラ切り		SE2-F3
46	环	134	88	35	暗灰色	良	良	ヘラ切り		SE2-F4
57	环	130	84	40	灰 色	粗砂混	良	ヘラ切り		SK3-F3
83	环	126	78	31	灰 色	良	良	ヘラ切り		SD5-F
84	环	143	85	34	灰褐色	良	良	ヘラ切り		SD8-F
85	环		84		灰褐色	良	良	ヘラ切り		SD8-F
45	环	126	68	29	灰 色	良	良	ヘラ切り		SE2-F1
58	高台环		80		青灰色	良	良	ヘラ切り		SK3-F3
60	高台环		74		青灰色	粗砂混	良	ヘラ切り		SK3-F3
81	环		50		明灰色	良	可	回転糸切り		SE2-F1
86	环		59		灰 色	良	良	回転糸切り		SD8-F
61	环	130	60	35	灰 色	良	良	回転糸切り		SK3-F1
87	高台皿	134			暗灰色	良	良			SD8-F
62	蓋	130		28	青灰色	粗砂混	良			SK3-F1
43	环	124			灰 色	良	良			SE2-F3
59	甕	(198)			暗灰色	良	良			SK3-F1
55	壺	166			暗灰色	粗砂混	良			SK3-F3
47	壺	90			暗灰色	良	良			SE2-F4
98	双耳杯				灰 色	良	良		耳はヘラ削り	151-179-II
99	甕		102		暗灰色	良	良	ヘラ切り		SD8-F
73	甕	220			青灰色	良	良			SE2-F1 SK4-F
89	甕	(355)			暗灰色	良	良			SD8-F
94	甕				暗灰色	良	良			SD8-F
80	壺				暗灰色	良	良		ヘラ削りの後ナデ	SK1-F
71	甕				茶褐色	良	良			SE2-F3
95	甕				灰 色	良	良		カキ目	SD5-F
93	甕				赤褐色	良	良			SD5-F
92	甕				暗灰色	良	良			SD8-F
56	环	142	48	40	明灰色	良	良	回転糸切り		SK3-F3



第9図 赤焼土器

○赤焼土器

遺物 番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技	調整技法	出土地点—層位
		口径	底径	器高						
8	环	129	48	51	赤褐色	良	良	回転糸切り		SE 2—底
39	环	136	50	50	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SE 2—F 3
40	环	132	47	46	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SE 2—F 2
41	环	127	58	52	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SE 2—F 3
42	环	126	58	52	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SE 2—F 2
91	环	136	54	47	赤褐色	良	良	回転糸切り		SK 4—F



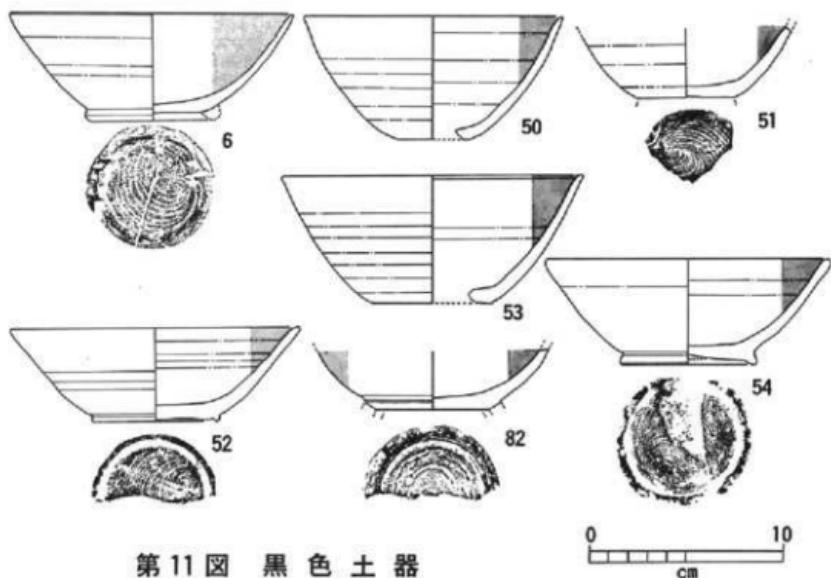
第10図 赤焼土器

○赤燒土器

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し法	調整技法	出土地点一層位
		口径	底径	器高						
48	环	123	53	49	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK 3-F 3
88	高台环		56		赤褐色	良	良	ヘラ切り		SD 8-F
49	高台皿	135	54	25	赤褐色	良	良	回転糸切り		SK 3-F 1
90	甕	(242)			灰褐色	粗砂混	良		外面カキ目	SD 5-F
100	土錘				赤褐色	粗砂混	良			151-176-II
65	壺	(480)			褐色	良	良			SK 3-F 1
64	壺	(330)			褐色	良	良			SK 3-F 1
67	壺	(348)			赤褐色	良	良			SK 3-F 1
68	壺	(234)			暗赤褐色	良	良			SK 3-F 1
69	壺	(348)			明灰色	粗砂混	良			SK 3-F 3
70	壺				明灰色	粗砂混	良			SK 3-F 3
66	壺				褐色	良	良			SK 3-F 1
96	壺				暗褐色	粗砂混	良			SD 8-F
72	甕				褐色	良	良			SE 2-F 3
63	壺				灰褐色	粗砂混	良			SK 3-F 3
97	壺				褐色	良	良			SD 8-F

○黒色土器

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し法	調整技法	出土地点一層位
		口径	底径	器高						
6	高台环	146	50	57	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ	SK 3-F 2
50	环(134)(40)	64	赤褐色	良	良			内面ミガキ	SK 3-F 3	
51	环	50	赤褐色	良	良	回転糸切り	内面ミガキ	SK 3-F 3		
53	环	156	62	65	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ	SK 3-F 1
52	高台环	150	60	49	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ	SK 3-F 1
82	高台环		59		黑褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内外面黒色処理	EB17-F
54	高台环	145	60	55	暗赤褐色	良	良	回転糸切り	内面ミガキ	SK 3-F 3



第11図 黒色土器

○墨書き土器

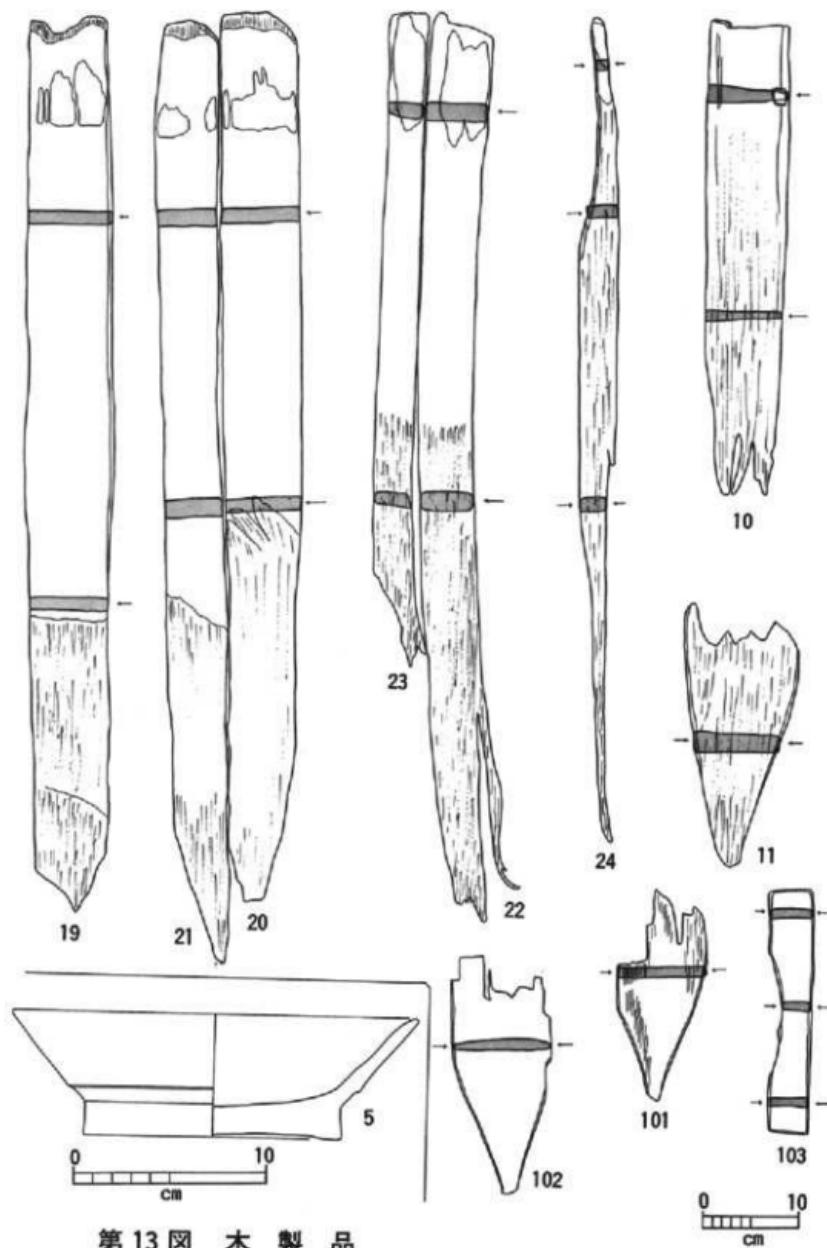
遺物番号	器形	種別	色調	胎土	焼成	切り離し 技	墨書き 部位	出土地点—層位	備考
25	高台环	須恵器	暗青灰	良	良	回転糸切り	底部	SE 2-F 3	◎ [蓋]カ長
26	高台环	須恵器	暗青灰	良	良		底部	SE 2-F 3	[蓋]カ長
27	环	須恵器	灰色	良	良	ヘラ切り	底部	SE 2-F 4	(転用碗)
28	环	須恵器	明灰色	良	良		体部	SE 2-F 3	長
29	高台环	須恵器	暗青灰	良	良	ヘラ切り	底部	SE 2-F 4	[蓋長]カ
30	环	須恵器	明灰色	良	良	回転糸切り	底部	SK 3-F 3	[蓋]カ
31	环	赤燒土器	淡黄色	粗砂混	良	回転糸切り	底部	SE 2-F 3	[蓋長]カ
32	环	赤燒土器	赤褐色	粗砂混	良		体部	SE 2-F 3	
33	高台环	須恵器	明灰色	良	良	ヘラ切り	底部	155-179-I	
34	环	須恵器	灰色	良	良	ヘラ切り	底部	SP 27-F	
35	环	赤燒土器	赤褐色	良	良		体部	SE 2-F 3	



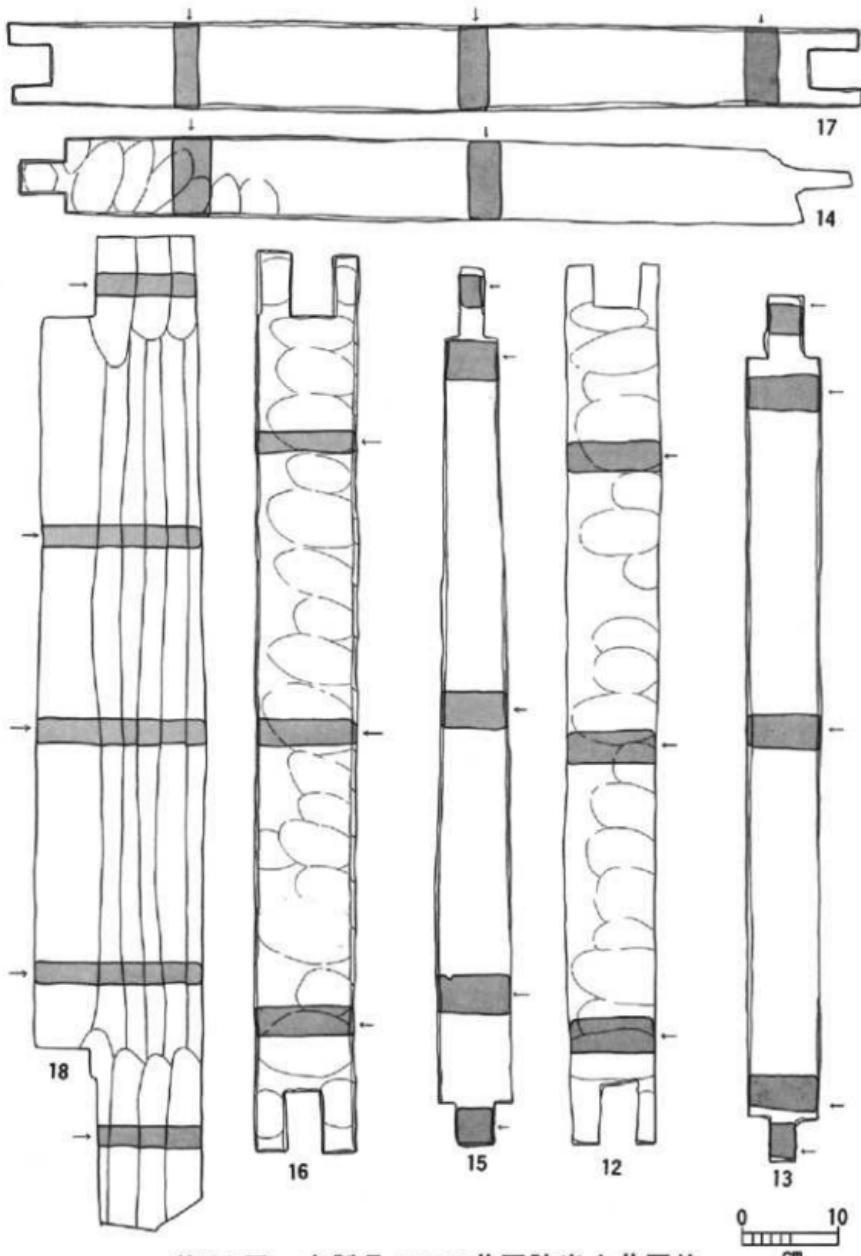
第12図 墨書土器

○墨書土器

遺物番号	器形	種別	色調	胎土	焼成	切り離し 技	墨書部位	出土地点-層位	備考
36	环	赤焼土器	赤褐色	良	良	回転糸切り	底・体部	SE 2 - F 4	
37	环	須恵器	暗青灰	良	良	ヘラ切り	体部	SE 2 - F 4	(中)カ
38	高台环	須恵器	暗青灰	良	良	回転糸切り	底部	SK 3 - F 2	◎ 万(転用碗)
74	环	須恵器	明灰色	良	良		体部	SK 3 - F 3	
75	高台环	須恵器	灰色	良	良	ヘラ切り	底部	SK49 - F 1	◎ [安]カ
76	环	須恵器	灰色	良	良	ヘラ切り	底部	SE 2 - F 4	
77	环	赤焼土器	淡黄色	良	良	回転糸切り	底部	SK 3 - F 2	
78	环	須恵器	灰色	良	良	ヘラ切り	底部	SE 2 - F 1	
79	环	須恵器	灰色	良	良	回転糸切り	底部	SE 2 - F 1	

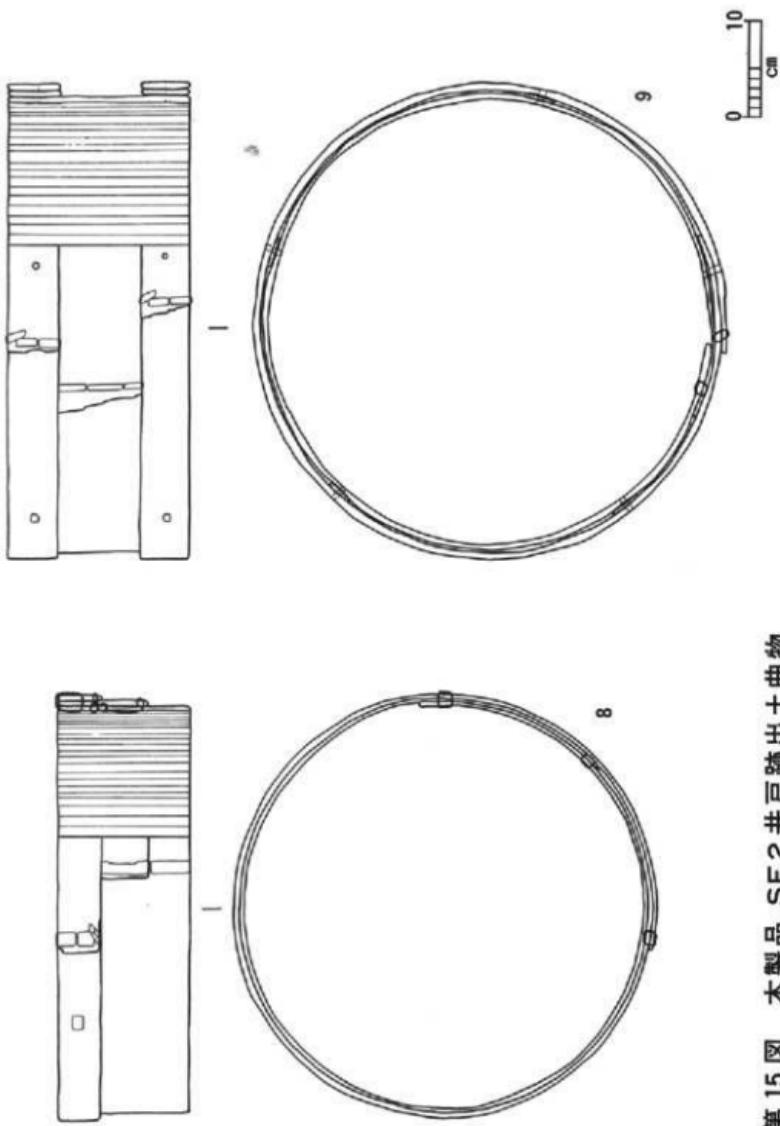


第13図 木製品



第14図 木製品 SE2井戸跡出土井戸枠

第15図 木製品 SE2井戸跡出土曲物



○出土土器片点数表

種別 遺構	赤焼土器	黒色土器	須恵器	陶磁器	計
S K 1	47	11	24		82
SE 2 覆土 掘り方	317 71	4 3	101 35		531
S K 3	192	54	110		356
S K 4	26		5		31
S D 5	85	3	43		131
S D 6	79	5	56	3	143
S D 8	178	8	147	13	346
S P 27	4	5			9
S K 49	22	5	3		30

種別 出土地点	赤焼土器 (%)	黒色土器 (%)	須恵器 (%)	陶磁器 (%)	計
試掘 墓内	1,163 (67.2)	37 (2.1)	503 (29.0)	28 (1.6)	1,731
精査 区内	1,542 (45.0)	110 (3.2)	1,745 (50.9)	30 (0.87)	3,427
遺構 内	1,119 (60.9)	98 (5.3)	600 (32.6)	18 (0.98)	1,835
計	3,824 (54.7)	245 (3.5)	2,848 (40.7)	76 (1.1)	6,993

○木製品出土地点

No.	出土地点-層位	No.	出土地点-層位	No.	出土地点-層位	No.	出土地点-層位
19	SE 2 - F 3	11	SK 3 - F 3	17	SE 2 - F 3	12	SE 2 - 底
20・21	SE 2 - F 3	101	SK 3 - F 3	14	SE 2 - F 3	13	SE 2 - 底
22・23	SK 3 - F 3	102	SK 3 - F 3	18	SE 2 - 底	8	SE 2 - 底
24	SK 3 - F 3	103	SK 3 - F 3	16	SE 2 - 底	9	SE 2 - 底
10	SK 3 - F 3	5	SE 2 - 掘り方	15	SE 2 - 底		

IV まとめ

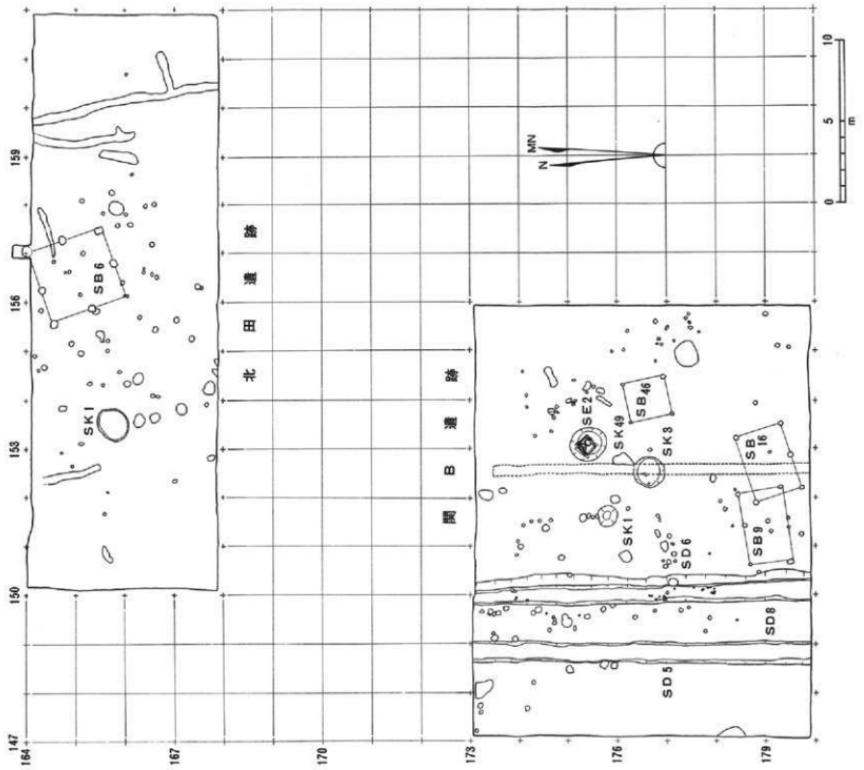
関B遺跡は、その北側にある北田遺跡と一連の集落跡である。2間×1間の規模をもつSB9とSB16は住居跡と思われ、SB46は作業小屋的なものであろうか。そのすぐ西側にSK3の土壙があるが、これは廃棄された井戸で、SE2はその後に掘られて集落が廃絶するまで使用されていた井戸である。発掘区西側には南北にのびるSD5とSD8の溝が走っているが、その中间は2間巾の道であった可能性がある。これらの遺構の配列から、一部分ではあるが集落の様相の一端がうかがわれる。住居の規模や細い丸柱と小さな掘り方は、これが一般的の農民の住居であったと思われる。

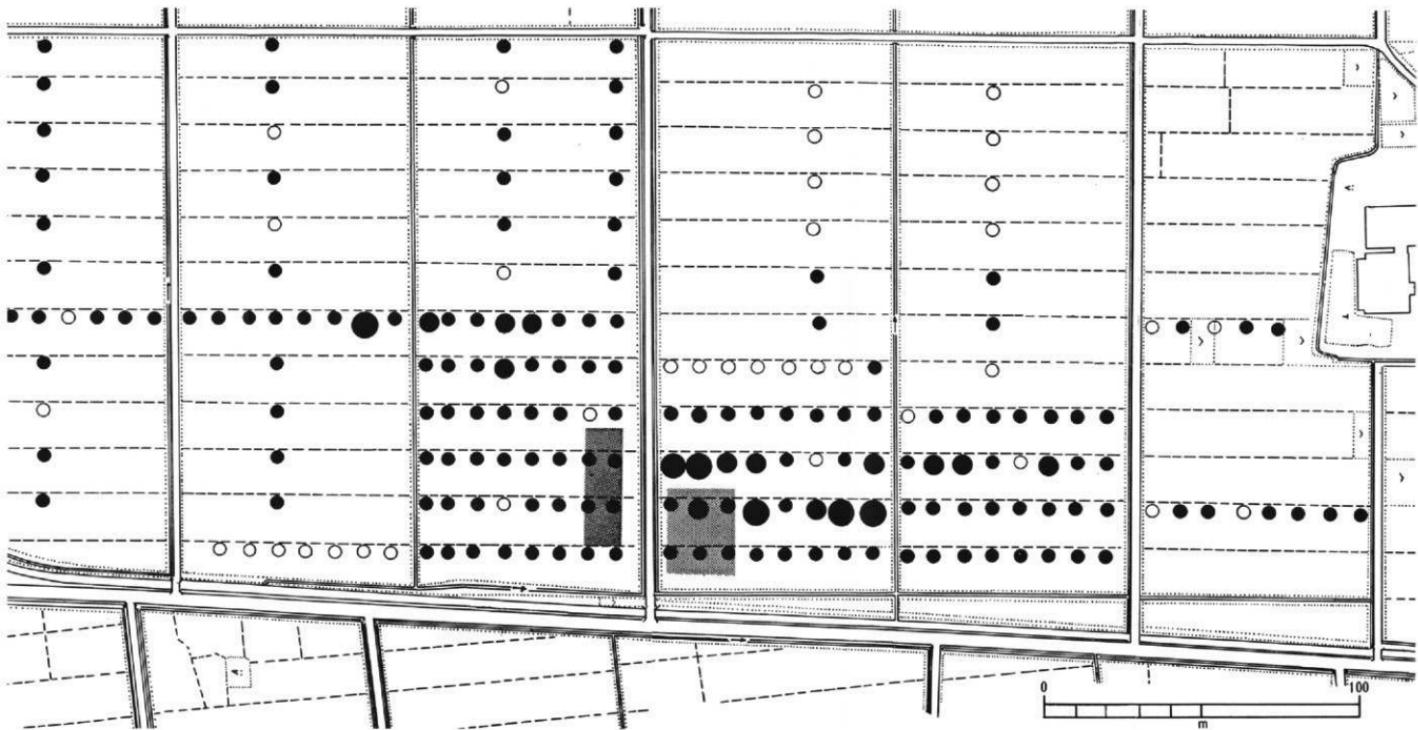
SE2の井戸から「靈長」などの墨書ある土器片が出土しているのは興味深い。井戸跡から墨書土器が出土した例は多いが、水がいつまでも豊かに湧き出ることを願って、意識的に投げ入れたものと考えられている「靈長」には、そのような意味がこめられている。おそらくSK3の井戸は水の出が悪く廃棄されるが、SE2の井戸がそのようにならないように祈る人びとの願いが託されていたのであろう。まだこの文字は、県内での出土例がない。道教の影響のもとに行われた呪符の一つであろう。

破片数から見るならば、須恵器よりわずかに赤焼土器が多い。10世紀より11世紀にいたる集落跡では赤焼土器の占める比重が多くなり、75%を越す場合もある。赤焼土器は回転糸切り技法が定着し、土師器が消滅する9世紀後半頃よりその数を増す傾向がある。9世紀代では、須恵器と赤焼土器がほぼ半々か、赤焼土器が僅かに上まわるようである。环は範切りによるものが主体を占めることから考えても、9世紀後半から10世紀初頭という年代が考えられるであろう。なお本遺跡から出土する須恵器は、もっとも近くに位置するもので酒田市鶴瀬山1号窯出土のものに類似する。ここから約2km東側の丘陵地帯にある。この窯跡の産と断定することはできないが、「城輪柵」の成立と同じ時期、つまり9世紀前半から築窯を開始している酒田市東部丘陵地帯の窯跡の何れかが供給源であろうと思われる。

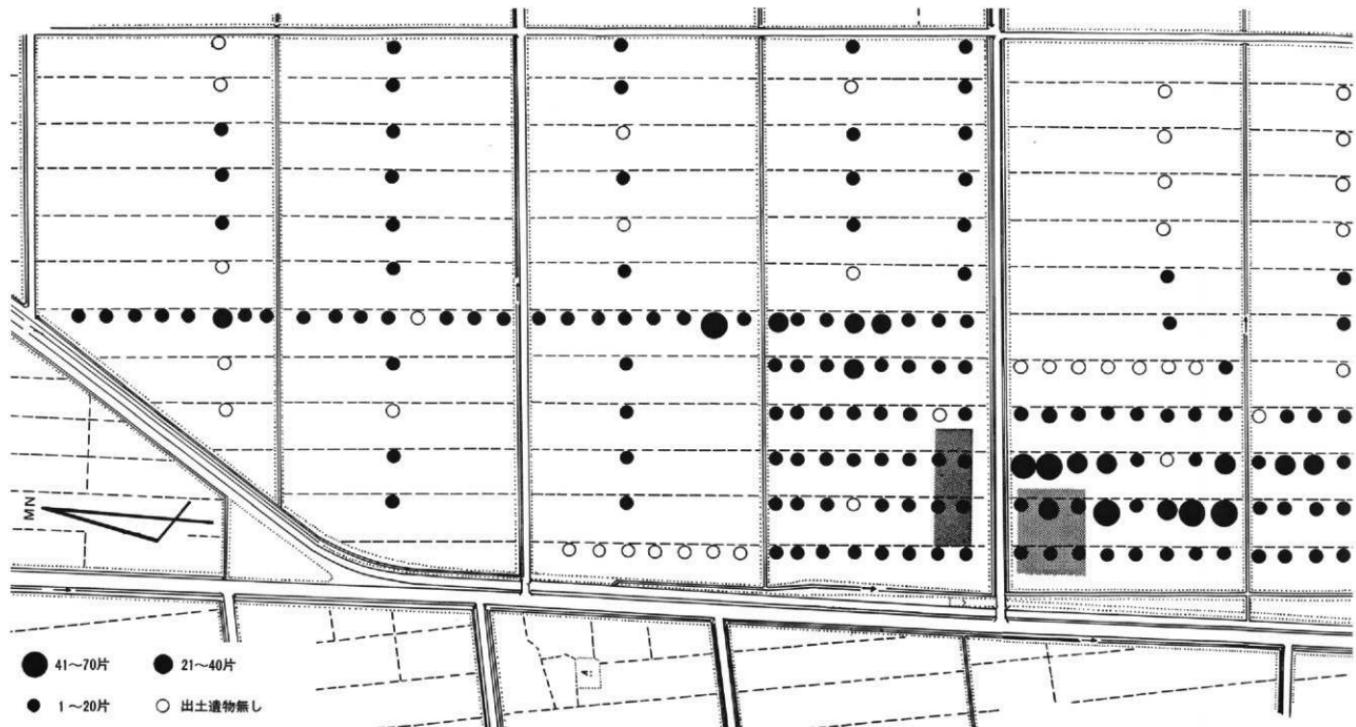
本遺跡の北方には北田、境興野があり、また南には高阿弥陀、横代、大槻新田、さらに平田町早稲田、桜林などの遺跡が南北に直線状に連なり、鮫海郡衙擬定地の平田町郡山に至る。そしてその南には最上川が西流し、古代の水駅があったといわれる飛鳥がある。ここから北上して出羽国府城輪柵にいたる道がまっすぐのび、その道路ぞいに本遺跡をはじめとした集落が存在したものと推定される。今後、本遺跡の主要部分である現幹線道路西側の発掘調査が行われるであろうが、これから調査の進行に大きな期待がかけられる。

第16図 北田・閑B遺跡遺構平面図





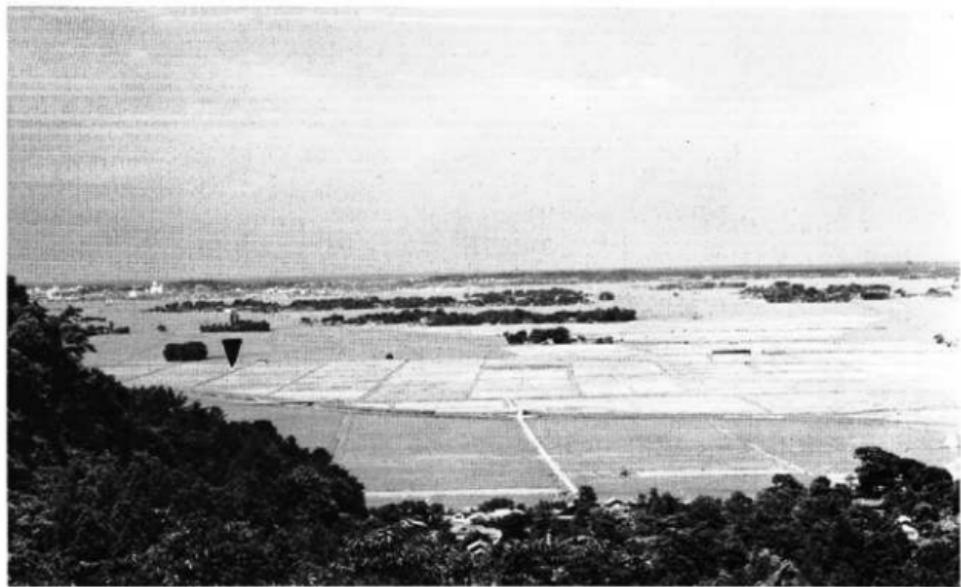
物出土状況



第17図 北田・関B遺跡試掘壕内遺物出土状況

図

版



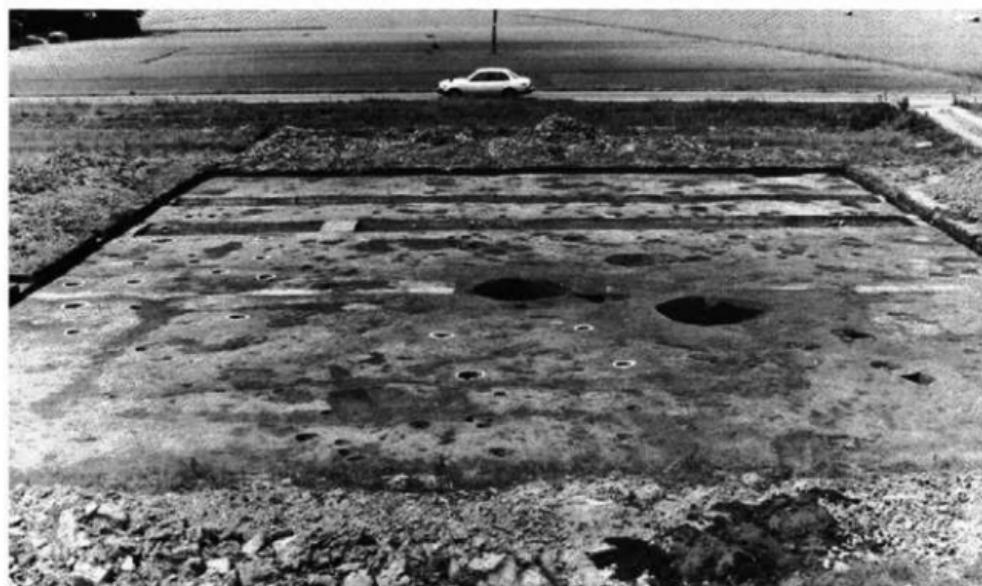
△ 遺跡遠景（東より） ▼印



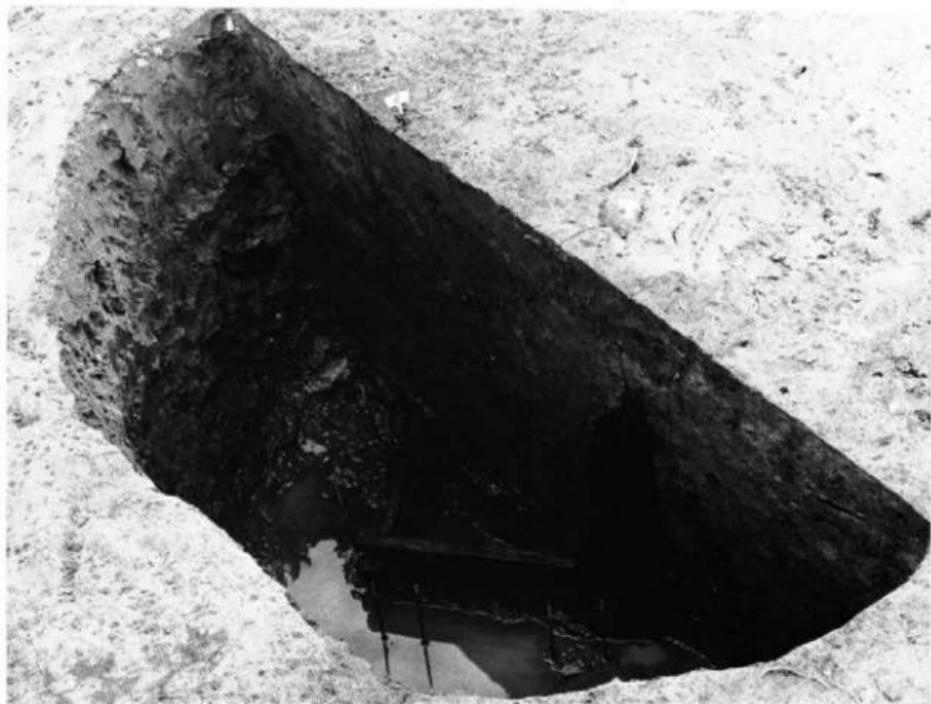
△ 遺跡近景（北より）



△ 試掘状況（北より）



△ 精査区近景（東より）



△ SE2 井戸跡 (南東より)



△ SE2 井戸跡 (南東より)



△ SE2 井戸跡 (南西より)



△ SE2 井戸跡内出土土器 RP8 (北より)

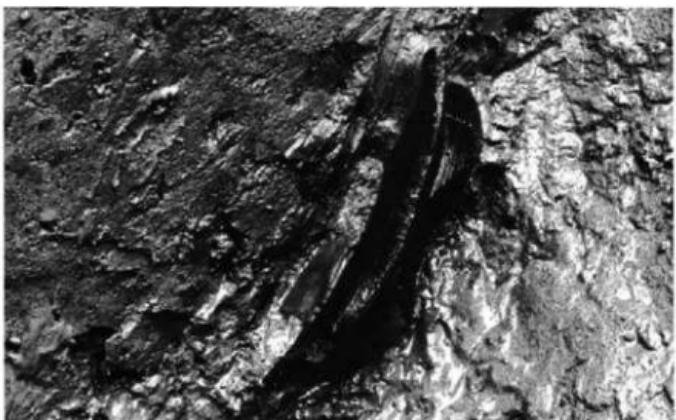
図版 5

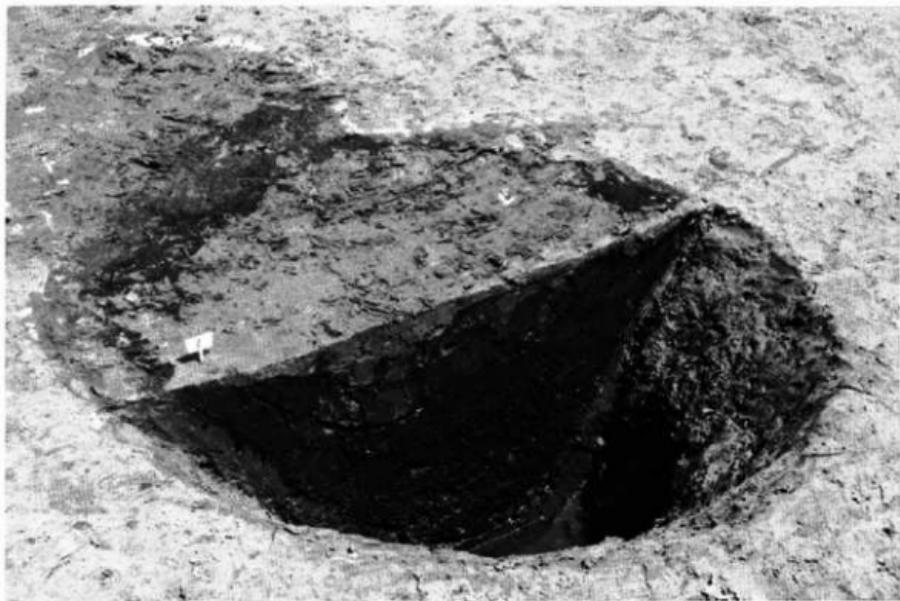


SE2 井戸跡 ▷
(南東より)



SE2 井戸跡 ▷
掘り方内出土木盤
RW5 (南より)





△ SKI 土壌跡 (南西より)



△ SK49 土壌跡 (南より)



△ SK3 土壌跡 (南東より)



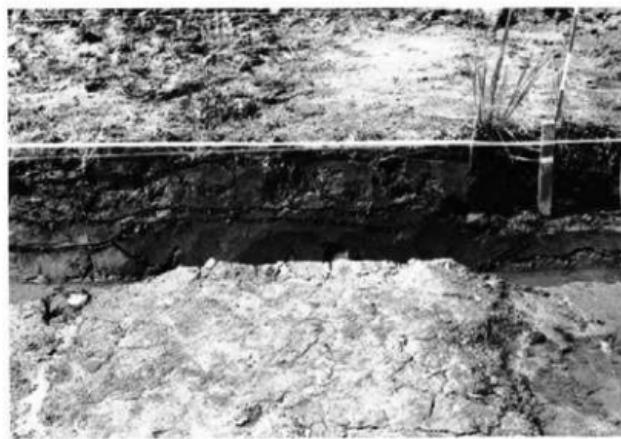
△ SK3 土壌跡 (南東より)



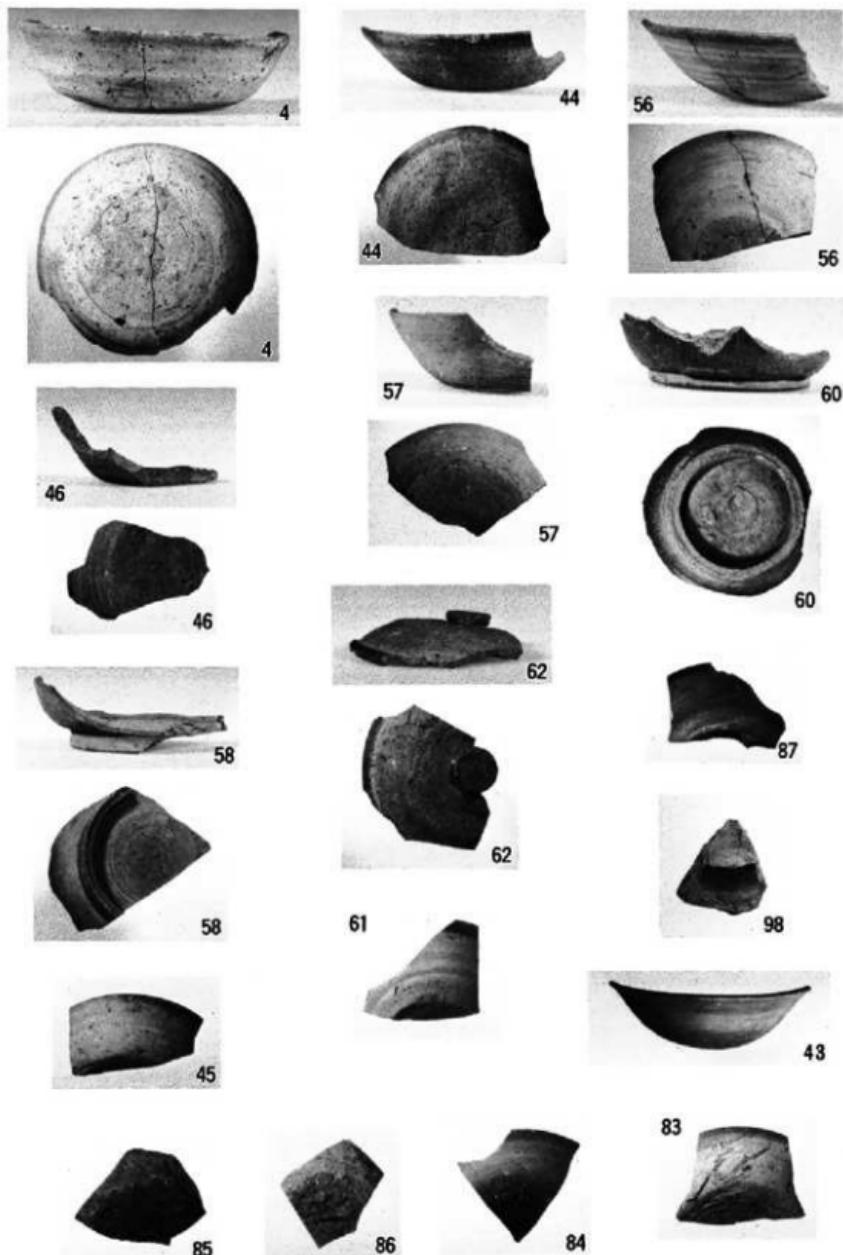
△ SK4 土壌跡 (南西より)



△ SD6 (中央部)・SD8 溝跡(北より)



△ SD5 溝跡 (南より)

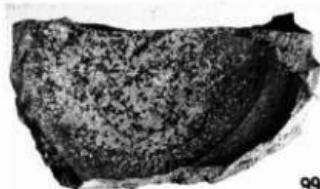




80



47



99



59



55



99



89



92(外)



92(内)



73



93
(外)



93
(内)



94
(外)



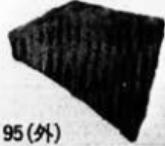
94
(内)



71
(外)



71
(内)



95(外)



95(内)



8



81



48



91



40



39



42



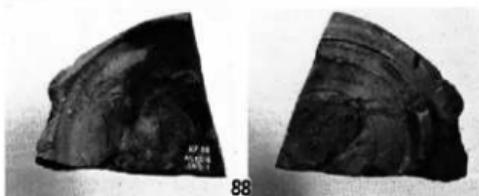
100



41

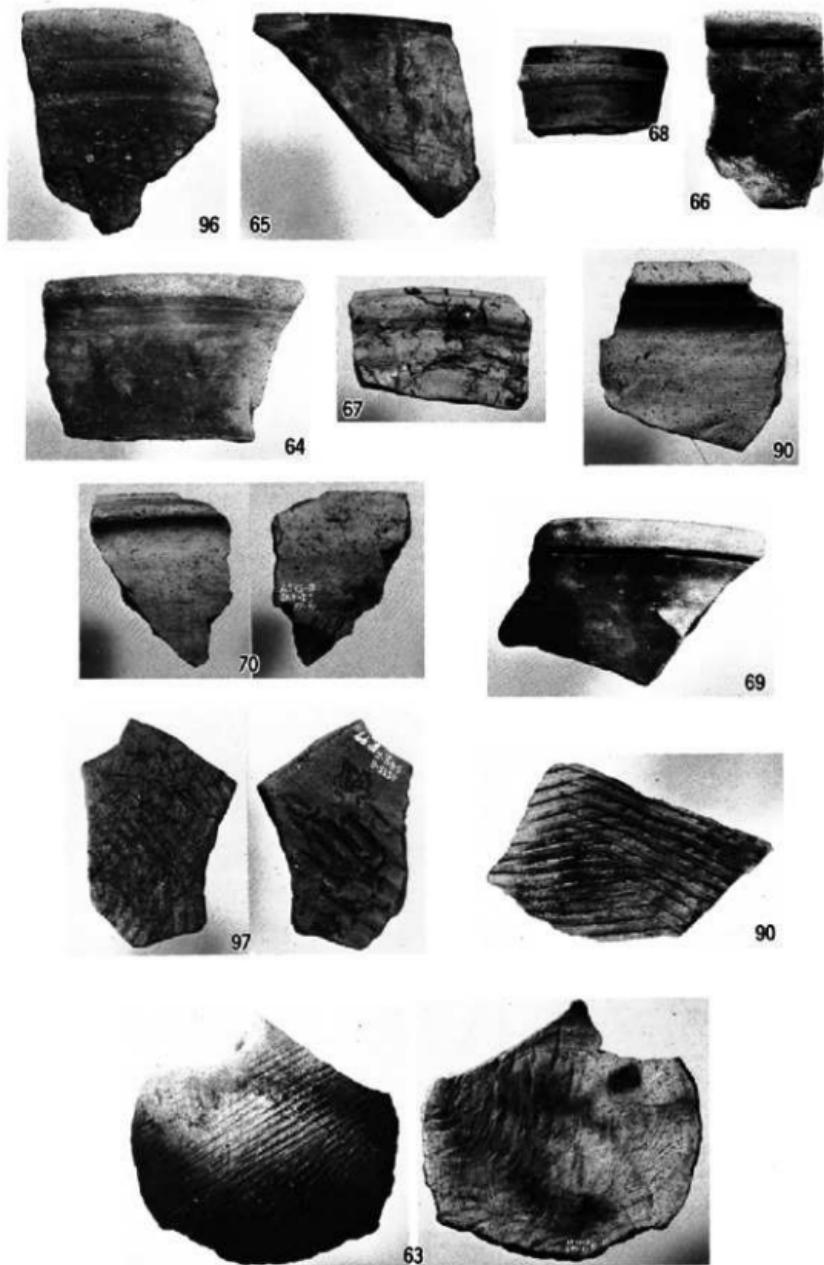


49

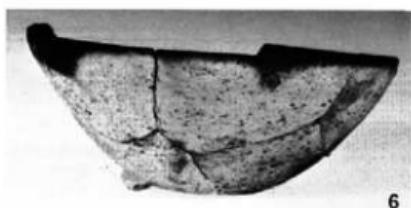


88





赤燒土器



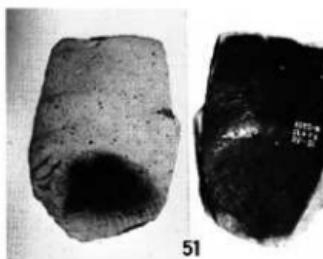
6



54



52



51



82



50



51



53

黒色土器



26



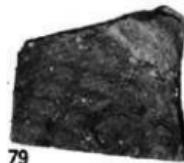
25



31



29



79



28



36



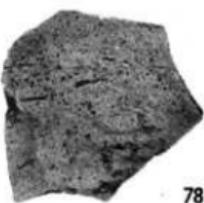
30



77



27



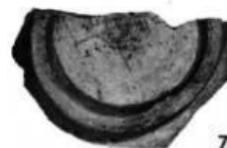
78



35



33



75



37



38



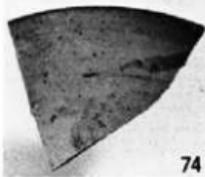
76



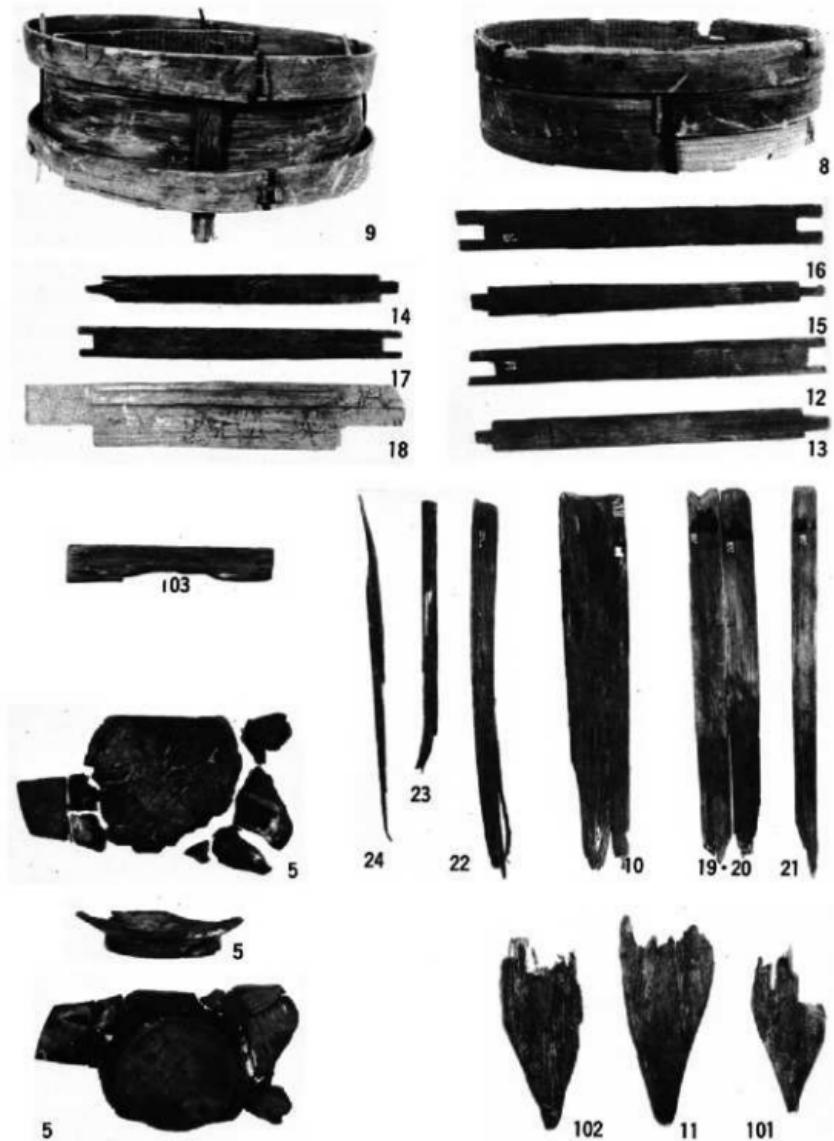
32



34



74



山形県埋蔵文化財調査報告書 第47集

関 B 遺 跡
発 挖 調 査 報 告 書

昭和56年3月23日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 鶴岡印刷株式会社

鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080
